

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

青空文庫

一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうには川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなどころを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジヨバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジヨバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちができるのでした。ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジヨバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジヨバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジヨバンニを見てくすつとわ

りました。ジヨバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジヨバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができずでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「ではよし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうでしょう。」

ジヨバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジヨバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読

んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋しよさいから巨きおおな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒べいじな頁ページいっぱいはに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈はずもなかつたのに、すぐに返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの天あまの川がわがほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂じやりや砂利つぶの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油しゆの球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮うかんでいるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲すんでいるわけです。そしてその

天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒即ち星しか見えないのでしよう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでし

たがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅すみの桜さくらの木のところを集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流すからすうり 烏 瓜うりを取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ふつてどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝えだにあかりをつけたりいろいろ仕度したくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴くつをぬいで上りますと、突き当りの大きな扉とをあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしぼったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居おりました。

ジヨバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルに座すわつた人の所へ行つておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、

「これだけ拾つて行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函はこをとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅の所へしやがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒あわつぶぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼を拭ぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾つた活字をいっぱいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもつた紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取つて微かすかにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまつて小さな銀貨を一つジヨバンニに渡しました。ジヨ

バンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた靴をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢よく帰つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いが下りたままになつていました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかつたの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上つて行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいたのです。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったろうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿さしをとつてパンといっしょにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄かんごくへ入るようなそんな悪いことをした筈はずがないんだ。

この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈きぞうした巨きな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で「以下数文字分空白」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちようどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途とちゆう中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せる

と円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、かま罐がすつかり煤すすけたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるでほうき箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなでからすうり烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと」いっしょ緒なら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジヨバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附かたうけると勢よく靴をはいて「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジヨバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜ひのきのまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジヨバンニが、どどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジヨバンニの影かげぼうしは、だんだん濃こく黒くはつきりなって、足をあげたり手を振ふつたり、ジヨバンニの横の方へまわって来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾こうばい配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越こす。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわって、前の方へ来た

とジョバンニが思いながら、おおまた大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりの尖とがったシャツを着て電燈の向う側の暗い小路こうじから出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、
「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫さけびました。

ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植つた家の中へはいつていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠ねずみのようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまぎまの灯あかりや木の枝えだで、すっかりきれいに飾かざられた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、

一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるつくるとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤ガラスに載ばんつて星のようにゆっくり循めぐったり、また向う側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形だえんけいのなかにめぐつてあらわれるようになって居おりやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたような帯になつてその下の方ではかすかに爆発ばくはつして湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚あしのついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立っていましたいちばんうしろの壁かべには空じゅうの星座をふしぎな獣けものや蛇へびや魚や瓶びんの形に書いた大きな図がかつていました。ほんとうにこんなような蝸せりだの勇士だのそらにぎつしり居るだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

それから俄にわかにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。

そしてきゆうくつな上着の肩かたを気にしながらそれでもわぎと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄すみきつて、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なみや櫛ならの枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢たくさん山の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛くちぶえを吹ふいたり、

「ケンタウルス、露つゆをふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾いくほん本も幾本も、高く星ぞらに浮うかんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂においのするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子ぼうしをぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしいんとして誰たれも居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまつすぐに立ってまた叫びました。するとしば

らくたつてから、年老つた女の人、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」ジヨバンニが一生けん命勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジヨバンニを見おろして云いました。

「おつかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少ししたつてから来てください。」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとうございます。」ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやつて来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバンニの同級の子供らだったので、ジヨバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジヨバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、
「ジヨバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジヨバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジヨバンニはまっ赤になつて、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらつて、怒らないだろうかというようにジヨバンニの方を見ていました。

ジヨバンニは、遁げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジヨバンニは、なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でびよんびよん跳んでいた小さな子供らは、ジヨバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジヨバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

五、天氣輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星おおぐまぼしの下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼって行きました。まつくらの草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジヨバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏からすうり瓜うりのあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松や檜ならの林を越こえると、俄にわかにがらんと空がひらけて、天あまの川がわがしらしらと南から北へ亘わたつているのが見え、また頂いただきの、天氣輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ひきぎくかの花が、そこらいちめん、夢ゆめの中からも薰かおりだしたというように咲き、鳥が一びき疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジヨバンニは、頂の天氣輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗やみの中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫さけび声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジヨバンニの汗あせでぬれたシャツもつめたく冷されました。ジヨバンニは町はずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果りんごを剥むいたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジヨバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ている、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷いところとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴ことの星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬またたき、脚が何べんも出たり引つ込こんだりして、とうとう鞆きのことのように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやつぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六、銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく螢ほたるのように、ペカペカ消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼こうせい青のそらの野原にたちました。いま新しく灼やいたばかりの青い鋼はがねの板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云いう声が出たと思うといきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の螢ほたるの火を一ぺんに化石させて、そら中に沈しずめたという工合ぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくなるいたために、わざと穫とれないふりをして、かくして置いた金剛石こんごうせきを、誰たれかがいきなりひっくりかえして、ばら撒まいたという風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジヨバンニは、思わず何べんも眼を擦こすってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄い

ろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座すわっていたのです。車室の中は、青い天てん蚕ろうと絨じゆうを張った腰掛こしかけが、まるでがら明きで、向うの鼠ねずみいろのワニスを塗った壁かべには、真しんち鍮ゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジヨバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅おくれてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」と云いました。

ジヨバンニは、（そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けたのだ。）とおもいながら、

「どこかで待つていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちが出来てしまっていました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直つて、勢よく云いました。

「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたつて、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿つて一条の鉄道線路が、南へ南へとたどつて行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上に、一一の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジヨバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」
ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジヨバンニは云いながら、まるではね上りたいくらい愉快ゆかいになつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口くちぶえ笛ふを吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きわめようとなりましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼めの加減か、ちらちら紫むらさきいろのこまかな波をたてたり、虹にじのようにきらつと光つたりしながら、声もなくどンドン流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐りんこう光の三角標が、うつくしく

立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りまわりました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顛えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

「ことごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのです。」

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草しばぐさの中に、月長石つきじょうせきでも刻きざまれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとつて、また飛び乗ってみせようか。」ジヨバンニは胸おしを躍おどらせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行つてしまったから。」

カムパネルラが、そう云つてしまいかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっばいに光つて過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもつたりんどうの花のコツプが、湧わくように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光つて立つたのです。

七、北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切つたというように、少しどもりながら、急せぎこんで

云いいました。

ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙だいだいいろの三角標のあたりにいらつしやつて、いまぼくのことを考えているんだった。）と思おもいながら、ぼんやりしてだまつていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣なきだしたいのを、一生けん命めいこらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびつくりして叫さけびました。

「ぼくわからない。けれども、誰たれだつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸さいわいなんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なかほんとうに決心けつしんしているように見みえました。

俄にわかに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石こんごうせきや草の露つゆやあらゆる立派りっぱさをあつめたような、きらびやかな銀河かわけの河床かわどこの上を水は声こゑもな

くかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らなただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雲で鑄たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、どの人もつましく指を組み合せて、そつちに祈っているのです。思わず二人もまつすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつ

てしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなっていました。ジヨバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼あまさんが、まん円な緑の瞳ひとみを、じつとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わって来るのを、度つつしんで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席もとに戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちを、何気なくちがった語ことばで、そつと談はなし合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈あかりと、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄いおうのほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなってひろがって、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤ダイヤル面には、青く灼やかれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなってしまいました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジヨバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかった電燈が、一つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこから中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかつたのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちようど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉トパーズや、またくしやくしやの皺しゆう曲まがをあらわしたのや、また稜かどから霧きりのような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走つてその渚なぎさに行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもつとすきとおつていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮ういたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光りんこうをあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えている崖がけの下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘ほり出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈かがんだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。

「行つてみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りましました。その白い岩になつた処ところの入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖ったくるみの実のようなものひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじやない。岩の中に入ってるんだ。」
「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘ってるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近づいて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコップをつかたりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起を壊さないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、も少

し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になつて、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ぎつと百二十年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやつてくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年前ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみ

てもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。それもスコップではない。そのすぐ下に肋骨ろつこつが埋もれてる筈はずじゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計うでどけいとをくらべながら云いました。「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙いそがしそうに、あちこち歩きまわって監督かんとくをはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝ひざもあつくなりませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけられると、ジヨバンニは思いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席すわに座つて、いま行つて来た方を、窓から見ていました。

八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外がいとう套を着て、白い中きれでつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛かけた、赤髯あかひげのせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジヨバンニは、少し肩をすぼめて挨拶あいさつしました。その人は、ひげの中でかすかに微笑わらいながら荷物をゆっくり網あみだな棚たなにのせました。ジヨバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうつと前の方で、硝子ガラスの笛ふえのようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室てんじょうの天井てんじょうを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲かぶとむし虫むしがとまってその影が大きく天井てんじょうにうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジヨバンニやカムパネルラのようにすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きませぬ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩けんかのようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒おこつたでもなく、頬ほほをぴくぴくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売しょうばいでね。」

「何鳥ですか。」

「鶴がんや雁がんです。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじやありませんか。そら、耳をすまして聴きいてごらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」 ジョバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるとこを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべったくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑った眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がいったいここで鷺なんぞ喰べるだろうとジヨバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずっと柄がいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになつて、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちようどさっきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べったくなつて、ならんでいました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、す

つときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたししました。ジヨバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかつたのですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云つて遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものを貰つちやすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に聞（一字分空白）させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、

なあに、こつちがやるんじやなくて、渡り鳥どもが、まつ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのどこへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方とほうもなく細い大将へやれつて、斯こう云つてやりましたがね、はつは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射さして来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊きこうと思つていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、「鳥捕りは、こつちに向き直りました。」

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけあ、砂に三四日うずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じやない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切つたというように、尋たずねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立つて荷物をとつたと思うと、もう見えなくなつていました。

「どこへ行つたんだらう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光りんこうを出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体きたいだねえ。きつとまた鳥をつかまえるところだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云つた途端とたん、がらんとした桔きせきよ梗ういろの空から、さつき見たような鷺あしが、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いつばいに舞まいおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すつかり注文通りだというようにほくほくして、両足をつきり六十度に開いて立つて、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片かたつ端はしから押えて、布の袋ふくろの中に入れるのでした。すると鷺あしは、螢ほたるのように、袋の中でしばらく、青くペかペか光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなつて、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天あまの川がわの砂の上に降りるものの方が多かつたのです。それは見ていると、足が砂へつくや否いなや、まるで雪の融とけるように、縮ちぢまって扁ひらべつたくなつて、

間もなく熔鋳炉ようこうろから出た銅の汁しるのように、砂や砂利じやりの上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのでしたが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは二十疋びきばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾てつぽうだまにあつたつて、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだに恰ちやうど度合うほど稼かせいでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣となりにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのです。

「どうしてあすこから、いつぺんにここへ来たんですか。」ジヨバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。

「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジヨバンニは、すぐ返事しようと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い

出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

九、ジョバンニの切符きつぷ

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟むねばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼めもさめるような、青サファイア宝玉と黄トパーズ玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面凸とつレンズのかたちをつくり、それもだんだんまん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパスの正面にきましたので、緑の中心と黄いろな明るい環わとができました。それがまただんだん横そへ外れて、前のレンズの形を逆くに繰り返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろの

はこつちへ進み、また丁度さつきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、ねむ睡っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。―鳥捕りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子ぼうしをかぶったせいの高い車掌しゃしょうが、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困つて、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠ねずみいろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳たたんだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらるかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やっちなえと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて、ていねい丁寧ていねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼ

たんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジヨバンニはたしかにあれは証明書か何かだったと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジヨバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。」車

掌は紙をジヨバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのできこみました。ジヨバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草からくさのよ
うな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその
中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを
見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。
天上どこじやない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なる

ほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈はずでさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジヨバンニが赤くなつて答えながらそれを又また畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき驚わの停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較みくらべて云いました。

ジヨバンニはなんだかわけもわからずににわかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりしました。驚さぎをつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやつてしまいたい、もうこの人のほんとうの幸さいわいになるなら自分があの光る天の川の河原かわらに立つて百年つづけて立つて鳥をとってやつてもいいというような気がして、どうしてももう黙だまっていられなくなりました。ほんとうにあなたのほし

いものは一体何ですか、と訊きこうとして、それではあんまり出し抜けぬだから、どうしようかと考えて振り返ふつて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網あみだ柵なの上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺さぎを捕る支度したくをしているのかと思って、急いでそっちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子すなごと白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖とがった帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたろう。」カムパネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行つたろう。一体どこでまたあうのだろう。僕ぼくはどうしても少しあの人に物を言わなかつたろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はある人が邪魔じゃまなような気がしたんだ。だから僕は太へんつらい。」ジヨバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思おもいました。

「何だか苹果りんごの匂においがする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議ふしぎそうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨のいばらの匂もする。」ジヨバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジヨバンニは思いました。

そしたら俄にわかにそこに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびっくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣となりには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹ふかれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだね。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛かあいらしい女の子が黒い外套がいとうを着て青年の腕うでにすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召めさされているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いいました。けれどもなぜかまた額しわに深く皺しわを刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジ

ヨバン二のとなりに座すわらせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座つて、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛こしかけたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待つていらつしやつたでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわとこのやぶをまわつてあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待つて心配していらつしやるんですから、早く行つておつかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、

ツインクル、ツインクル、リトル、スター をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょ、あんなに光っています。

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいところを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやってくるのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。どうなすつたのですか。」さつきの燈台看守がやつと少しわかつたように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈しずみましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用

で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発たったのです。私は大学へはい
 っていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど十二日目、今日か昨日きのうの
 あたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾かたむきもう沈みかけました。月のあかりはど
 こかぼんやりありましたが、霧きりが非常に深かったのです。ところがボートは左舷さげんの方半分
 はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちに
 も船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫さけびました。
 近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈いのつて呉くれました。けれどもそ
 こからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても
 押おしのける勇気がなかつたのです。それでもわたしはどうしてもこの方たちをお助けす
 るのが私の義務だと思ひましたから前にいる子供らを押しつけようと思ひました。けれど
 またそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこ
 の方たちの幸福だとも思ひました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりでは
 よつてせひとも助けてあげようと思ひました。けれどもどうして見ているとそれができな
 いのです。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂きやうき氣のようにキス
 を送りお父さんがかなしいのをじつところえてまつすぐに立つているなどとてももう腸はらわたも

ちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟かくごしてこの人たち二人を抱だいて、浮うかべるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていていました。誰たれが投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたが、滑すべつてずうっと向うへ行つてしまいました。私は一生けん命で甲板かんばんの格子こうしになつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく「約二字分空白」番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄にわかに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦うずに入つたと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没なくなられました。ええボートはきつと助かつたにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちこが漕こいですばやく船からはなれていましたから。」

そこから小さないのりの声が聞え、ジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろなことをぼんやり思い出して眼めが熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかつたらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍こおりつく潮水や、烈はげしい寒さとたたかつて、たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまない

ような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。)
 ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でできごとなら峠とうげの上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉きょうだい弟あにはもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡ねむっていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔やわらかな靴くつをはいていたのです。

ごどごどごどと汽車はきらびやかな燐りんこう光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈げんととうのようでした。百も千もの大きさまぎまの三角標、その大きなものの上には赤い点をうった測量旗も見え、野原のははそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおつと青白い霧のよう、そこからかまたはもつと向うからかときどきさ

まぎまの形のぼんやりした狼煙のろしのようなものが、かわるがわるきれいな桔梗きぎよういろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗きれいな風は、ばらの匂においでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果りんごはおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金きんと紅こうでうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝ひざの上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派りっぱですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてなめました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとってジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ぼっちゃんかた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ぼっちゃんといわれたのですこししやくにさわってだまっていましたがかムパネルラは

「ありがとう、」と云いました。すると青年は自分でとって一つずつ二人に送ってよこし

ましたのでジヨバンニも立ってありがとうと云いました。

燈台看守はやつと 両腕りょううでがあいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでいいものができるとな約束やくそくになつて居おります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子たねさえ播まげばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻からもないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわすかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです。」

にわかになつて男の子がぱつちり眼をあいて云いました。

「ああぼくいまお母さんの夢ゆめをみていたよ。お母さんがね立派な戸棚とだなや本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこわらつたよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきてあげましようか云つたら眼がさめちやつた。ああここさつきの汽車のなか

だねえ。」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」

姉はわらって眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰たべるようにもうそれを喰べていました、また折角せっかくむ剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きぬのような形になって床ゆかへ落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに光って蒸発してしまうのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂しげった大きな林が見え、その枝えだには熟してまっ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標さんかくひょうが立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸しみるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜ふを聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原が敷

物かがひろがり、またまっ白な蠟ろうのような露つゆが太陽の面を擦かすめて行くように思われました。
 「まあ、あの鳥からす。」カムパネルラのとりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱しかるように叫びましたので、ジヨバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうになりました。まったく河原かわらの青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になつてとまってじつと川の微光びこうを受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた「約二字分空白」番の讚美歌さんびかのふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座すわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰たれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラも一いっしょ緒しよにうたい出したのです。

そして青い橄欖かんらんの森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまひそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗へらされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀くじやくが居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジヨバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかおる子に云いました。

「ええ、三十疋びきぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジヨバンニは俄にわかに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は二つにわかれしました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛ゆるい服を着て赤い帽子ぼうしをかぶった男が立っていました。そして両手に赤と

青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。ジヨバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りましました。すると空中にざあつと雨のような音がして何かまつくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲てつぽう丸だまのように川の向うの方へ飛んで行くのです。ジヨバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗ききよういろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組いくくみも幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのです。

「鳥が飛んで行くな。」ジヨバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気きやうきのようにふりうごかしました。するとびたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしやあんという潰れたつぶような音が川下の方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫さけんでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。

それといつしよにまた幾万という鳥の群がそらをまつすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの子が顔を出して美しい頬ほほをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいたいと思いつながらだまって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてみだまって席もどへ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引こつ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引こつ込めたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立たつて口くちぶえ笛ふを吹ふいていました。

(どうして僕はほくこんなにかなしのだろう。僕はもつとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるん

だ。) ジョバンニは熱^{ほて}つて痛いあたまを両手^{わき}で押えるようにしてそっちの方を見ました。
 (ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパ
 ネルラだつてあんな女の子とおもしろそうに談^{はな}しているし僕はほんとうにつらいなあ。)
 ジョバンニの眼はまた泪^{なみだ}でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白
 く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖^{がけ}の上を通るようになりました。向う岸もまた
 黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなつて行くのでした。そし
 てちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう
 美しい緑いろの大きな苞^{ほう}が赤い毛を吐^はいて真珠のような実もちらつと見えたのでした。そ
 れはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバ
 ニニが窓から顔を引つ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のは
 てまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめん^{めん}に植えられてさやさや風^{かぜ}にゆらぎ
 その立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸つた金剛石^{こんごうせき}のよ
 うに露^{つゆ}がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが
 「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても

気持がなおりませんでしたからただぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車もうごかずしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律せんりつが糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽こうきやうがくだわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高たけたかい青年も誰もみんなやさしい夢ゆめを見ているのでした。

（こんなしずかないとこで僕はどうしてもつと愉快ゆかいになれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っていながらまるであんな女の子とばかり談はなしているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジヨバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子ガラスのような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたという風ではきはき談している声がしました。

「どうもろこしだつて棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありましようかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になつています。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたらうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ていたのでした。突然ともろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追つて来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさしました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追いかけているんでしよう。」

「いいえ、汽車を追つてるんじゃないんですよ。猫りようをするか踊おどるかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒たおれるようになりインデアンはびたつと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴つるがふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影かげももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碇がし子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたとうもろこしの林になってしまいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖がけの上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅はばひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜けいしゃがあるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう。」さっきの老人らしい声が云

いました。

どんどんどん自動車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下へのぞけたのです。ジヨバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。自動車が小さな小屋の前を通つてその前にしよんぼりひとりの子供が立つてこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんどんどん自動車は走つて行きました。室^{へやじゆう}中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛^{こしかけ}にしっかりとみついでいました。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど^{はげ}激しく流れて来たらしくときどきちらちら光つてながれているのでした。うすあかい河原^{かわら}なでしこの花があちこち咲いていました。自動車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走つていました。

向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジヨバンニがやつとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじやないんでしようか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらっと白く腹を光らせ空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたいくらい気持が軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしようか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしよう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしよう。けれど遠くだけか

らいま小さいの見えなかつたねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌きげんが直つて面白おもしろそうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子ふたごのお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫さけびました。右手の低い丘おかの上に小さな水晶すいしやうでもこさえたような二つのお宮がならんで立つていました。

「双子のお星さまのお宮つて何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴きいたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知つてらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩けんかしたんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おつかさんお話なすつたわ、……」

「それから彗ほうきぼし星がギーギーフーギーフーて云つて来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛ふえを吹ふいて居るんだろうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがっていらっしやったのよ。」
「そうそう。ぼく知ってらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにチウムよりもつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジヨバンニが云いました。

「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首っ引きして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「蝸の火ってなんだい。」ジヨバンニがききました。

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ。」

「蠅って、虫だろう。」

「ええ、蠅は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蠅いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫さされると死ぬつて先生が云つたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯こう云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一匹きの蠅がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですつて。するとある日いたちに見附みつかつて食べられそうになつたんですつて。さそりは一生けん命遁にげて遁げたけどどうとういたちに押おえられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺おぼれはじめたのよ。そのときさそりは斯いう云つてお祈いのりしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私がかんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもどうとうこんなになつてしまつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉くれてやらなかつたろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにもなしく命をすてずどうかこの次にはまこと

のみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかい下さい。って云つたというの。そしたらいつか蝸はじぶんの中からだがまつ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰おつしやつたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にならんでいるよ。」

ジョバンニはまつたくその大きな火の向うに三つの三角標がちようどさそりの腕うでのようにこつちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざまの樂ねの音や草花なほいの匂においのようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露つゆをふらせ。」いきなりいままで睡ねむっていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマストリイのようにまつ青な唐櫓とうりゆうかもみの木がたつてその中にはたぐさんのたくさんの豆電燈まめでんとうがまるで千の螢ほたるでも集つたようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿一枚？なし」

「ボール投げなら僕決してはずさない。」

男の子が大威張りおおいばで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度したくをして下さい。」青年がみんなに云いました。「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジヨバンニたちとわかれたいようなようすでした。

「ここでおりないといけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭いやだ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジヨバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一いっしょ緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符きっぷ持ってるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りないといけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから

。「女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行つてらつしやるしそれに神さまが仰おつしやるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだ。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまつてどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんとうのたつた一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたつた一人です。」

「ああ、そんなでなしにたつたひとりのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつましく両手を組みました。

女の子もちようどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜おしそうでその顔いろも

少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙だいだいやもうあらゆる光でちりばめられた十字架じゆうじかがまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環わになって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜うりに飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果りんごの肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞めぐっているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそのその遠くからつめたいそのの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈あかりの灯のなかを汽車はだんだんゆるやかにとなりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出し

ました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえって二人に云いました。

「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒ったようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえってそれからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄かにならんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のながさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子ガラスの呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金きんの円光をもった電気栗鼠りすが可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行に

ついた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちようど挨拶でもするようにぽかつと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまひほんとうにもうそのまま胸にも吊つるされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白ない渚ぎにまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕の中からだなんか百ペン灼やいてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしつかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっばい新らしい力が湧わくようにふうと

息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋ぶくろだよ。そらの孔あなだよ。」カムパネルラが少しそつちを避さけるようにながら天の川のひととこを指さしました。ジヨバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔がどほんどあいているのです。その底がどれほど深いかその奥おくに何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジヨバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗やみの中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進まんで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄にわかに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫さけびました。

ジヨバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそつちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕うでを組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラの座すわっていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。ジョバンニはまるで鉄砲丸てつぽうだまのように立ちあがりました。そして誰たれにも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉のどいっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘おかの草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱ほてり頬ほほにはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさんつづの灯を綴つづつてはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたつたいま夢ゆめであるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかります。黒な南の地平線の上では殊ことにけむったようになってその右には蠍さそりぎ座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変つてもいないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお

母さんのことが胸いつぱいに思いだされたのです。どんどん黒い松まつの林の中を通つてそれからほの白い牧場の柵さくをまわつてさつきさつきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰つたらしくさつきさつきなかつた一つの車が何かの樽たるを二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて一本の牛ぎゆう乳にゆう瓶びんをもつて来てジヨバンニに渡わたしながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大將早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしまひましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただきます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になってその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集って橋の方を見ながら何かひそひそ談はなしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一いっせい斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいつぱいで河が見えませんでした。白い服を着た巡じゆんさ査も出ていました。

ジヨバンニは橋の袂たもとから飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際みずぎわに沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしてしました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう鳥からすうり瓜うりのあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにせずかに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方すへ州すのようになって出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしよだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押おしてやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みつからないんだ。ザ

ネリはうちへ連れられてった。」

ジヨバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖^{とが}つたあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまつすぐに立つて右手に持った時計をじつと見つめていたのです。

みんなもじつと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨^{おお}きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或^{ある}いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというよ

うな気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよつて博士の前に立つて、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといつしよに歩いていたのでと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶に来たと思つたものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」と叮ねいに云いました。ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握つたまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつつた方へじつと眼を送りました。ジヨバンニはもういろいろなこと胸がいっばいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：中村隆生、野口英司

校正：野口英司

1997年10月28日公開

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>